

セミナー「里山生態系とナラ類の種生態」

滋賀県湖西地域の里山利用の解明に向けた2つのアプローチ

京都大学大学院農学研究科・日本学術振興会特別研究員 堀内 美緒

Two approaches to clarify the use of local resources in Satoyama in the western part of Shiga Prefecture. Mio Horiuchi (*Kyoto University / Research fellowship for young scientists, Japan Society for the Promotion of Science*)

湖西地域の里山

滋賀県湖西地域にある比良山地の東側の山麓は、コナラなどのナラ類やアカマツを主体とする里山利用が行われてきた地域である。この地域のナラ類やアカマツは、江戸時代から燃料のための割木(薪)、柴として、琵琶湖水運によって琵琶湖東岸地域を中心に広範囲に流通していた。燃料革命により割木、柴の利用が停止した昭和30年代まで、豊富な山林資源が近郊の需要を受けて利用されてきた地域であった。

比良山地東麓の中部は、中・古生層の山地と、微高地の少ないならかな表面をもつ扇状地から形成されている。現在ではスギ・ヒノキの人工林の割合が多いが、扇状地にはアカマツ林やアベマキ林などがみられ、山地にはミズナラ・シデ林などがみられる。

その中に位置する大津市八屋戸地区守山集落は、比良山系に水源を発する野離子川の集水域を範囲とし蓬萊山(標高1174m)などの山頂から琵琶湖岸(標高約80m)までを含み、面積は約360haの農村集落である。江戸時代から昭和30年代までは、世帯数約70件とほぼ一定であったが、現在では大阪や京都を通勤圏とする住宅地として人口が増加し、約270件の世帯が暮らしている。都市近郊の

里山である。

里山の定義は、森林に限定するものから、集落など農村環境までを含むものまで、さまざまである。私は造園学の立場から、伝統的な農村に見られる集落、森林、農地などの空間要素が一体となった集合体を、「里山ランドスケープ」と捉え、空間要素間のつながりを支えていた地域住民による日常的な資源利用のシステムの実態を把握することを目的に、守山集落に入り込んで研究を行ってきた。

資源利用システムの把握

資源利用のシステムを把握する方法としては、年配者への聞き取り調査、郷土史料などの文献調査、及びGISを利用した地形図や絵図など空間情報のデータの蓄積や分析の3つが基本となる。これらの方法は、日本の集落であれば何処でも比較的同じように出来る方法である。しかし、守山集落では、さらに2つのアプローチにより、過去の日常的な資源利用について詳細なデータを得ることが可能になった。

その1つ目が、日記分析である。聞き取りから把握できるのは昭和初期までが限界であるが、それより一世代前の地域住民によって記録された日記が守山集落に残っていたのである。しかも、守

山集落に典型的な生業である農業と農閑期の山仕事を 행っていたT氏の日記（明治33～大正11年）と、山人（ヤマド）と呼ばれる用材や割木生産を主な生業としていたI氏の日記（明治27～38、40～42年）という同じ時期に書かれた2種類の日記を手に入れることができた。日記は、半紙を綴じた帳面に、日付、その日に行った作業、天気が一行程度で簡潔に書かれていた。そこで、里山の資源利用の記述に着目し、山林資源に関する作業をすべて取り出してデータベース化した。

2つ目が、運搬具からのアプローチである。比良山地の東麓では、クロマツを輪切りにしたものを車輪にした簡単な組み立て式の荷車が農作業から山仕事まで運搬具として利用されていた。荷車であるから、必然的に積む量や、作業の場所に制限が出てくるはずである。しかも、車輪があるので、道が必要であり、それを管理するための社会的なしくみも必要であった。つまり、運搬具から、空間—社会の中での資源利用システムを量的にも把握できるのではないかと考えて、実際に運搬具を復元して、割木や柴を運んでみた。

日記分析の結果からは、農家のT氏と山人のI氏を合わせて272種類の生活、生業のために山林資源を採取、搬出、切りそろえるなどの作業を確

認することができた（堀内ら、2006）。樹種の分かる作業の種類が最も多かったのは、マツ（アカマツ・クロマツ）の45種類であった。マツの次に作業の種類が多かったのはスギの31種類で、次いでヒノキの23種類であった。

割木として多く利用されていたナラ類は、守山集落では、だいたい15～20年周期で伐採されてきた。しかし、日記の中にナラ類の名前がみられることは少なかった。一般的な割木や柴を作る山仕事は、「山行」とだけ記述されていることが多く、日常的な作業であったためにわざわざ記述されることが少なかったためと考えられる。ちなみに、農家のT氏の「山行」の作業日数は年40日前後であった（堀内ら、2007a）。また、農家のT氏の日記には、コナラとクヌギの苗を育て、山林へ植えた記述があった。

聞き取りによると守山集落では、コナラなどのひこばえは、ススキやイタドリなどの草と一緒に刈り取られた。このような山草利用は、6月1日前後の田植え時期の作業は「ホトラ刈」、7～8月の作業は「ヨクサ刈」と呼ばれ、農家のT氏の日記にも年に10～20日登場した。ヨクサは牛の敷き草や飼料にした後に田んぼの肥料に、ホトラは直接田んぼの肥料に利用された。

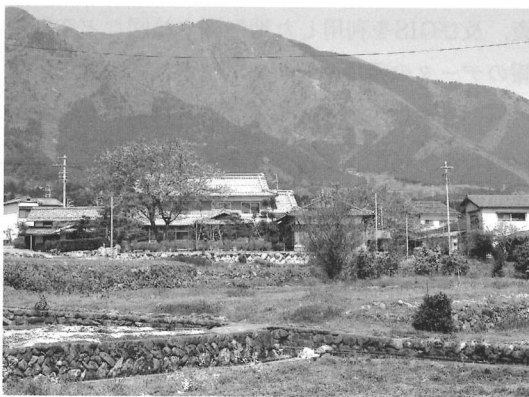


図1. 調査地の守山集落。



図2. トンボグルマによる材の運搬の再現。

作業の分布と頻度を日記に書かれた地名から、空間と結び付けてみると、宅地（標高100～150m）、積極的に植栽も行って育てたマツ、スギ、ヒノキ、ナラ類利用（150～300m）、ナラ類のひこばえ含む山草利用（300～500m）、柴利用（500m以上）という山林資源利用のパターンがみられた。このような宅地からの距離や標高に応じたパターンは、農家のT氏と山人のI氏に共通してみられた。一方で、頻度は、農家のT氏は山草や柴の利用頻度が多く、山人のI氏が宅地周辺のマツ、スギ、ヒノキ、ナラ類といった資源の利用頻度が多いといった違いがみられた。

割木にするためのナラ類やアカマツは、直径約15cm、長さ約5cmくらいで伐採され、「トンボグルマ」という荷車に乗せて山林から家、または湖岸まで運ばれた。1回の積載量は約15本であった。長さ1～2mの柴や山草は、トンボグルマに台を取り付けた「シバダシグルマ（ハシゴグルマ）」で運搬された。1回の積載量は、柴が約20束、山草は25～30束であった（堀内ら、2007b）。

守山集落には、誰でも資源を伐採してよい共有林では、伐採した日に持ちかえらないといけないという規則があった。共有林は、宅地から離れた標高500m以上のところにあつたため、必然的に、トンボグルマで1日1回の搬出に限られ、資源の採取量が制限されていた。また、林道の維持管理は、集落総出の「道作り」として行われ、林道の谷側には、崩壊や転落防止のためにイヌブナやヤマザクラなどの自生の落葉樹が巨木のまま残され

ていたり、柴の柵が設置されたりするなど、構造的な工夫も行われていた。このような運搬具に伴う制限要因や慣習によって、資源利用が体系化され、山林資源が持続的に利用されていたことが分かったのである。

日記と運搬具という、2つの研究素材に出会うことで、里山資源の伝統的利用の実態を量や空間から具体的に把握できたことは、今後の里山林管理の指針を示せるのではないかと考えている。里山は、地域性があるものである。守山集落と隣合う集落でも、植物資源の呼び名や使い方、それを管理する社会組織は異なるのである。今後も、地域に入り込みながら、歴史的な里山の形成過程を踏まえる努力を重ねる中で、現在の里山が抱える課題に向き合っていきたいと考えている。

引用文献

- 堀内美緒・深町加津枝・奥 敬一・森本幸裕.
2006. 明治後期の日記にみる滋賀県西部の里山ランドスケープにおける山林資源利用のパターン. ランドスケープ研究, 69 (5): 705-710.
- 堀内美緒・深町加津枝・奥 敬一・森本幸裕.
2007a. 明治後期から大正期の滋賀県西部の里山ランドスケープにおける山林資源利用の変化. ランドスケープ研究, 70 (5): 563-568.
- 堀内美緒・奥 敬一. 2007b. 比良山地東麓におけるクルマによる運搬方法と山林利用. 民具研究, 136: 1-12.

